

松山猛の 時計王通信



突然来日したマキシミアン・ブッサー氏とアラン・シルベスタイン氏。その目的は、共同で作ったオロロジカル・マシンNo.2モデルのお披露目でした。新作情報では、発売が始まったばかりの個性的時計を紹介しします。

2010年(平成22年)
2月6日 土曜日
vol.96

MB&F 谷口岳史・撮影 時計界のフィクサーが選んだ 次のパートナーは、アラン・シルベスタイン

2人の来日の話を聞いたのは突然であり、彼らがこんなプロジェクトを進めていたのにも驚かされた。昨年のバーゼルで意気投合した2人の共同作業は、あつという間に完成に至ったのだ。

時 計界のプロデューサーとして数多くの才能を発掘してきたマックス・ブッサーが、新しいプロジェクトとして取り組んだのが、異色の時計デザイナーとして活躍を続けてきた、アラン・シルベスタインとの時計作りだった。

2008年に発表されたオロロジカル・マシンNo.2をベースにしたこの時計は、まったく新しい表情をもち、我々の前に登場したのである。オリジナルのNo.2からは想像もできないくらいミニマルなデザインの、その名も「ブラックボックス」という時計として。

来日した2人に会って、この友



アラン・シルベスタイン
インテリア・建築デザイナーとして活躍し、1987年、3本の時計を携えてバーゼルデビュー。パウハウスの影響を受けたデザイナーとして、フランスの時計産業中心地ブザンソンのアトリエにて数量限定の時計製作を続けている。

マキシミアン・ブッサー
ローザンヌでマイクロ・テクノロジー・エンジニアリングを学び、ジャガー・ルクルトに入社。その後、ハリ・ウィンストンで、独立時計師を起用したオーパスシリーズを担当。2005年、MB&F(マキシミアン・ブッサー&フレンズ)設立。

情にあふれた共同作業について僕は聞いてみた。マックスが初めてアランの時計を意識したのは、彼がジャガー・ルクルトで働いていた頃だというから、もうずいぶん以前のことだ。
「ある日仕事でドイツに出かけたときのことだった。高速道路で真っ黒のBMWのカブリオレの幌をあげて、黒革のファッションで決

いうわけなんだよ」
一方、アランは初めてオリジナルのNo.2を見たとき1940年代に流行したボックスカメラを連想したという。「そしてそこにパウハウスの理念を加えてデザインしてみた」のだそうだ。マックスはこれを見て最初は驚いたが、やがてその素晴らしさを理解できたのだという。

過剰なほどSF的だったケースが、このNo.2では、シンプルな漆黒のデザインになっている。この独特のマット感にはシリコン・オキサライド・コーティングという技法を取り入れたPVD加工を施したもので、指紋などの汚れがつきにくいのだという。そしてケースに穿たれた2つの文字盤のためのホールは、確かに往年のステレオカメラを彷彿させるものだ。右側の文字盤にはジャンピングアワーによる時間表示と、同心で動くレトログランド分針がセットされており、左側の文字盤にはレトログランドする日付、そしてムーンフェイズ表示が備えられている。この2つの文字盤を眺めていると宇宙船の窓に並んでいる人物にも見えるのだ。

20年前よりシルベスタイン氏に注目していたというブッサー氏だが、昨年のバーゼルワールドで同テント内に出品したことで話が加速。2人はまるで古くからの友人のようだった。



めた男の腕に、三原色の針を付けた黒い時計があるのが見えたんだ。それは強烈な印象だったよ。そしてそんな時計をデザインするデザイナーが、フランスにいたことを知ったと

2009年のバーゼルワールドで新しく特設されたテントのウッチファクトリーで、小さなブースを並べた2つの才能が、実を結んだのは喜ばしいことだ。
時計の世界はまさに生き馬の目を抜くように熾烈なものとなったが、彼らのように友情を軸に新しい時計作りをコラボレートする動きが起きたのは素敵なことだ。



MB&F + アラン・シルベスタイン オロロジカル・マシン No.2.2
既発表のオロロジカル・マシンNo.2をアラン流にデザインした最新モデル。愛称「ブラックボックス」。デザインだけでなく素材にもこだわり、ケースはチタンに独自のPVD加工が施され、指紋がつきにくく、優しい触感。ちなみにローターは、ブッサー氏が幼少時代に影響を受けた日本製アニメ『グレンダイザー』の武器「ダブルハーケン」がモチーフ。59×38×13mm。自動巻き。黒牛革ストラップ。価格・発売時期未定(アワーグラス銀座店)